

旅と政変：幕末明治初期を旅行したモンブラン伯 (白山伯)

| | |
|------|---|
| 著者 | ヴァンデワラ ウィリー |
| 雑誌名 | 日文研叢書 |
| 巻 | 43 |
| ページ | 209-232 |
| 発行年 | 2009-03-19 |
| シリーズ | 共同研究報告書 No. 89 |
| URL | http://doi.org/10.15055/00005167 |

旅と政変―幕末明治初期を旅行したモンブラン伯（白山伯）

ウィリー・ヴァンデワラ

モンブランというのは山の名称ではなく、日本で白山伯と名乗った人物 Le Comte Descantons Charles de Montblanc（1833-94）¹という多少謎めいた人物である。彼は、幕末明治初期に二度訪日し、日本を縦横したのであるが、目的は見学ではなく、日本の社会と政界を理解し、その得た知識を政界や貿易に役立てることにあった。言わば一種の政商であつた彼が好んで活躍したのは政界と実業界との接点で、政界要人の名代・代理、相談役という類の活動領域で、それがややもすれば何か黒幕めいた雰囲気が纏わっており、その結果日本での評判は必ずしもよいものではなかつた。特に戦前は、偽の伯爵・貴族であつたという評判が立っていた。しかし、彼は旧制以来の古い素性の貴族ではなかつたにしても確実に貴族ではあつた。十九世紀初頭に父親がプロシアの、後胤のない貴族から領地を譲り受け、一八四一年にフランス国王から伯爵の爵位

を授与された。その領地がベルギーにあつたので、ベルギー国王からは男爵の爵位を授与された。モンブラン家はフランスの国籍をもっているわけだが、領地がベルギーにあつたことから兄弟がベルギー人に帰化した。しかし、嫡男の Charles はフランス国籍を死ぬまで保つたのである。彼の活動にはフランス市民であつた方が有利であつたからかも知れない。

第一回の極東への旅

モンブランの第一回の訪日の状況や時期については、確かな情報は得がたいのである。宮本又次氏によると、モンブランが初めて日本について関心を持ったのは、竹内保徳を団長とした幕府の遣欧使節が一八六二年にパリを訪問した時に遡るといふ。尤も、

伯爵はその当時敢えて使節団と積極的に接触する勇氣がなかったのだ。次に池田長発を団長とした幕府使節団がパリに滞在していた時に（一八六四年）、モンブランは使節団に連絡して、その相談役として雇用してもらおうよう頼み込んでみたのだが、結局 Alexander von Siebold 氏に先手を取られてしまったのだった。一方、高橋邦太郎によると、モンブランが日本へ渡航する決心をしたのは、竹内使節団（一八六二）がパリを去ってからであったというが、宮本又次によると、池田使節団の顧問になる働き掛けが失敗に終わった時、つまり一八六四年前後であった¹¹。いずれにしても日本へ渡航して、暫くの間、江戸・横浜に滞在している間中、とある斎藤健次郎（白川謙次朗とも、ジェラルド・ケンとも名乗る）に出会った。斎藤を説得して密かに伴ってパリに連れて帰ったことは事実である。何故なら、斎藤のパリ滞在に関する信用の置ける証言が幾つもあるからだ。従って、それを手がかりにして伯爵の第一回の訪日の時期を推定することが出来る。犬塚孝明が、日本渡航は一八六一年中に実行したと推定する¹²。柴田剛中を団長とする渡仏使節団（一八六五年）はリヨンでモンブランとの初対面の機会を得る。柴田大使はその日記に、斎藤は江戸地方出身の医師の息子で、「三年前に」フランス人に伴ってフランスへ亡命して来たものだ¹³と記している。畠山が一八六五年に物した日記には、確かに「斎藤は四年前にあるフランス人に身を任せて横浜で

乗船した」旨を記している¹⁴。また、森有礼が一八六五年にパリから兄弟に宛てた手紙によれば、斎藤というものは四年前に密かにフランスに渡航してきたということが分かる¹⁵。従って犬塚孝明が推定するように、モンブランの第一回の訪日は一八六一年中にあったことは先ず間違いないだろう。

Bassompierre によると、Charles de Montblanc 伯は、父 Charles Albéric de Montblanc の亡くなった一八六一年七月三〇日にフランスに滞在していたという。Bassompierre は、Charles の弟である Albéric de Montblanc の遺した所謂「記憶帳」に参照したと思われるが、Bassompierre の間違いなのか、それとも記憶帳の間違いなのか、兎に角事実ではない。モンブラン家に親交のある神父 Jean-Marie Bécél 氏が、一八六一年八月三日に Ingelmunster で挙行された父 Charles de Montblanc の葬式を記念して小冊子を印刷・刊行させた。現在 Descantons de Montblanc 家文書¹⁶の中に一冊収蔵されているこの小冊子は、他界したところの男爵に対する感傷的に美辞麗句で綴った追悼文を記載しているものであるが、文脈から Charles が父の葬式に出席していないことが推測されるものがある。Bécél 氏は、¹⁷いにも実際出席した親戚一同の名前を連ねていないものの、二箇所葬式に参列する「二人の息子は」という表現を使っている。ある一箇所、Bécél 氏はパリから列車に乗って出発する葬列の一景を次のように記述している。「一八六一年八月

二日一二時四五分に葬列一行は、高貴な一家に真心を尽くしている親友を数人伴って、悲しみに沈みこんだ二人の息子に見守られて、全速力でパリ北駅を発って国境に向かって走り出した」と。

同テキストを数行先のもう一箇所には、著者はこう書き続ける。「一言おっしゃって下さいと、至極の苦痛の重みに埋まった、愛情と忠誠心の気高い二人の御息息は私に向かって言われたのである。

一言お願いします。お言葉がきつとお母さんを慰めてくれるだろう」と。思うに、かの二人の息子というのは Albéric と Ernest de

Montblanc に違いない。なぜなら、この二人が当日欠席するものともらしい理由は全くないからだ。一方、Charles の場合は、滞日

の正確な時期が分からないにしても、一八六〇年代初頭に日本へ渡航したという事実からして、葬式当日の欠席には容易に説明が

つくものである。数箇月後、遺産相続の関係で Ingelmunster の邸宅で動産の査定が行われた際にも Charles は欠席している。同査定

は一八六一年一〇月二二日から二六日の間に行われた¹⁹。一方、伯爵が確かに一八六二年三月三一日までにはヨーロッパに帰っていることは、同日パリで公証人の立会いで公正証書二件に署名して

いる事実によって証左されるのである²⁰。従って Charles de

Montblanc が一八六一年に日本に渡航し、一八六二年初頭にヨーロッパに帰ってきたことは、先ず間違いないと推定できる²¹。

ところが、別説によれば Charles de Montblanc が初めて日本に渡

航したのは一八五八年で²⁰、さらにフランス特命全権大使 Gros 男

爵が日本へ向かう艦船に乗りあわせたという説もある²¹。天津条約（一八五八年）を締結後、Gros 男爵は今度は日本を目指して、幕

府と通商条約を締結するために上海から横浜へ渡航して、畢竟一八五八年一〇月九日に通商条約締結に漕ぎつけたのである²²。伯爵

はどういう事情によって Gros 男爵一行に随行したのか、どの地点から随行したのか、本当に随行なのかそれとも乗り合わせただけ

なのか、どういう旅程を辿ってきたのか、どの位日本に滞在したのか明らかでない。フランス外務省から一種の科学的調査の依頼

を受けて派遣されたというのであるが、それを裏付ける一次的な資料を目にしたことがない。さらに日本を訪問してから、フィリ

ピン列島へ渡り、調査を行ったといわれるが、それもフランス外務省による科学的調査の依頼のうちだったと思われる。ところが、

フランス外務省から依頼を受けたと言われる科学的調査というのは誠に謎めいたものである。まず、調査の地理的な範囲について

は不明点がある。フィリピン列島と日本と両国かそれともフィリピン列島のみが調査の対象になっていたのか。Bassompierre は、

日本のみを対象としているようで、フィリピン列島へ言及さえしていないようだ²³。一八六〇年までは個人としての日本への入国が

許されないことを当然ながら指摘した上、Bassompierre は伯爵が科学的調査を口実にフランス使節の一員として日本へ入国出来た

と推測するようである。一方、磯見らは、恐らく伯爵がフィリピン列島に関して論文を二点発表しているという事実を考え合わせ、フィリピン列島（のみ）が科学的調査の対象であったと述べている²⁴。

モンブランの著したフィリピン列島に関する論文二点の内の一つは民族学的調査に関する報告で、「フィリピン諸島」(*Les îles Philippines*) という題名で『日本・中国・韃靼・インドシナ学会紀要』(*Mémoires de la société des études japonaises, chinoises, tartares et indochinoises* (第二巻一八七七年) に発表されたものである²⁵。伯爵のフィリピン列島踏査の事実を証左する資料は外に見付からないが、その記述が自己の体験を踏まえて書き記されたものであるという印象が否めない文脈が数箇所あるので、先ず事実であると思う。同報告書は踏査の時期を挙げていないが、外部資料に基づいてそれを推定することができる。過去に世に問うた小論では、日本へ渡航の途中か日本からの帰途にフィリピン列島に立ち寄ったであろうという仮説を提言したことがあるが²⁶、今やその可能性が皆無に等しいと言う判断に至っている。フィリピン列島への寄航・踏査の時期を推定する根拠は次の通りである。報告書のある箇所では²⁷、伯爵は香港総督 John Bowring 卿と同伴してマニラを訪れたと述べている。さて、これは Bowring 卿の方から証左し得るものである。香港総督在任中 John Bowring 卿は、確かに一八五

八年末頃フィリピン諸島を訪問した²⁸。「フィリピン列島への訪問」(*A Visit to the Philippine Islands*) と題するこの訪問に関する同氏の紀行文においては、John Bowring 卿は一回のみとはいえ、確かにモンブランという人名に言及している。言葉の選択は多少曖昧で、Bowring 卿が実際伯爵本人とは会っていないことを暗示してはいるが、伯爵がその当時確かにフィリピン列島に滞在していたことを示唆しているものがある。同紀行文一〇二頁の注において、Bowring 卿は「*de la Giranière*・モンブラン両氏は目下フランス政府から依頼を受けて「フィリピン列島の科学的調査」を行なっている（鉤括弧は Bowring）と（マニラの）総司令官から聞いた」と述べている²⁹。

二人が会ったかどうかは確かでないものの、Bowring 卿の紀行文は大まかに伯爵の記述を裏付けている。ところで、John Bowring 卿のフィリピン列島滞在期間については不明点がある。一八五八年一月三日にマニラに到着³⁰、二〇日に同市を発ったという³¹。二〇日当日、Zamboanga および Iloilo 両島を訪問するために乗船した。Dia de los Reyes (列王の日) の日にマニラへ帰着し、その日総督府庁舎で「正式のレセプション」が行われたという³²。この正式のレセプションというのは、正月元旦か二日か三日に行われた筈である。その直後卿は直ちに Sual 島行きの船に乗り、そしてその足で香港へ帰った。不審なことにモンブランの記述によると、

Bowing 卿が「フィリピン列島に来て八日間の見学旅行をしている」³³ということだが、実際は一箇月以上滞在したらしい。このミスはおそらくただの記憶間違いによるものかもしれない。総督は一二月三日から二〇日までマニラに滞在したところ、モンブランの記憶には八日間として思い出されたかもしれない。その上、Bowing 卿もまた、その言葉を多少皮肉を含めたと見える引用符に入れている以上は、所謂科学的調査についてある種の疑問を抱いていた印象を禁じ得ないのだ。

モンブラン家文書の中には伯爵のフィリピン列島踏査の事実を直接に証左する文書が見付からないが、その事実を間接的に裏付ける資料はある。一八五七年にモンブランが Paul Proust de la Gironière 氏とマニラ市付近に製糖工場を設立するという内容の契約を結んだ契約書がそれである。契約内容は、Charles de Montblanc が Paul Proust de la Gironière 氏と共にフィリピンに渡航することを見込む条項も含めている。見返りに Charles が Paul Proust de la Gironière 氏の手に入る収入の三分の一を貰うことも盛り込まれている。砂糖はサトウキビを供給する現地の農民と共同して生産する予定であった³⁴。さらに、一八五七年一月七日付の、公証人の立会いで作成された公正証書を以て Charles Descantons de Montblanc はヨーロッパに不在中、一身上の事の運営を両親に一人任している³⁵。これ等の資料は明らかに Charles が長期間の留守を

見込んでの準備を整えていたことを指し示すものである。

余談になるが、Bowing 卿は、上記の紀行文に de la Gironière 氏たる人物に幾つかのページを割いている。このフランスのナント市出身の海軍軍医は一八二〇年にフィリピン列島に到着し、居を構える。あつという間にマニラで名だたる名医になる。そしてある若後家と結婚して、一八二四年に彼女の合意を得て、国の内陸部、まだ荒涼たる地域に広漠の土地を買得する。多大な努力を払った結果、大変繁盛する領地に発展させていく。ところが、生憎、その経済的成功に一連の身の上の惨事によつて翳りが射し、本人を消沈状態に追い込んだ。一八三八年に所有地を別のブルターニュ人に譲つてマニラに戻り、そこから乗船してフランスに帰る。その波乱に富んだ人生の話は何時しか小説家アレクサンドル・デュマ・ペールが聞き知り、それを題材にして *Les Mille et un fantômes* という短編小説を書き下ろす。短編小説のかけた波紋に呼応して Paul Proust de la Gironière はみずから自分の生涯を語るとして、遂に一八五五年パリの出版社から *Aventures d'un gentilhomme breton aux îles Philippines* を発刊する³⁶。

Bowing 卿は次のように書いている。「フィリピンでは度々会話の話題になっている以上は、de la Gironière 氏のロマンチックな本に言及せずには置けないだろう」。今忘れ去られている本は嘗て愛読されていたことがわかる。しかし、Bowing 卿はこの変わった

著書にたっぷり詰め込んだ変わった話に対して疑惑の念を表現している。いずれにせよ卿は、自分がフィリピンを訪問した時 *de la*

Gironière 氏が列島に居住していたことを明記している。

上記の諸般の情報を纏めてみると、次の結論になる。モンブラン伯は一八五八年にフィリピン列島を訪問したことは確かである。その時日本まで足を延ばした可能性は極めて低いと言わなければならない。日本への初回の渡航・滞在は一八六一・六二年に行った。その時横浜の居留地に暮らしており、江戸における仏国公使館(三田済海寺)にどうやら館員の資格を有して勤務していたらしい³⁷。そして一八六七年に再び日本へ渡航し、滞在することになる。その二回の訪日の間に恐らく日本語を学習し、日本の政治体制を研究していたらしい。さてどうやって日本語を学んだのだろうか。仮に「フランスお政」という困い者と恋愛の関係を持ったことが事実であるとすれば³⁸、愛人との付き合いを通じて日本語を覚える機会を得た可能性は別として、斎藤健次郎が恐らく彼の唯一の日本語の教師であつただろう。斎藤は熊谷の医師の弟であつた³⁹。田辺太一がその回顧録には、モンブランは第一回の日本滞在中の時、若者の斎藤を雇い入れて、言わば私設秘書としてフランスに連れて帰ったと述べている。田辺の回顧録の同じ文脈から、モンブランが如何に異国情緒の雰囲気を好んでいたか読み取ることができ

る。「予が池田筑後守にしたがつて、さきにパリへ行つたときも、

モンブランの招待をうけ、使節の許しを得てその晩餐会におもむいたところ、かの健次郎はすでに頭髪を刈っていたが、わざわざ飯髻をつけ、羽織袴の姿で、そのほかに南洋の蛮人には、赭色の裸体に紋布の腰巻をつけさせ、この二人を給仕として座の取り持ちをさせた。もちろんほかに西洋人の客はなく、ただ通弁のブレッキマンだけであつたが、それをもつてしても平日の生活が思いやられよう。モンブランは、実に異を立て、奇をてらう独特の癖を有していた。」と田辺は語っている⁴⁰。

モンブラン伯は第一回の訪日の後、その当時数少ない「日本通」の列に加わつた⁴¹。一八六四年江戸幕府が横浜鎖港を交渉する⁴²と共に井戸ヶ谷事件⁴³を謝罪するためにフランスへ派遣した、外国奉行池田長発(一八三七・一八七九)⁴⁴を正使とする使節団(文久三年一月二九日出航・元治元年七月一日帰国)がパリに滞在中の時、これと積極的に接触し、フランス政府要人との斡旋など世話役を買って出ようと試みたが、池田奉行が彼の説に賛同したものの、正式に相談役として雇ってもらふ念願が果たせなかつた⁴⁵。

また一八六五年(慶応元年)外国奉行柴田剛中を团长とした使節団が渡仏した際にもそれと接触し⁴⁶、かの *Philipp Franz von Siebold* と競争して柴田の信用を得ようとしたが、出航前に、*Roche* 公使によつて指名された要人以外は接触を拒否するようにとの指示を受けた柴田はその指示を厳守して、押し付けがましい伯爵の申し

入れを受け付けなかった⁴⁷。同じ頃、薩摩藩の密航留学生がロンドンに派遣されてきていると聞き及んだモンブランは、斎藤を伴ってイギリスへ渡り、新納久脩・五代友厚・松木弘安ら薩摩藩留学生の首脳部に面会を求めて、その世話役（出世人）を買って出た⁴⁸。薩摩藩留学生の首脳部はこの申し入れを受け入れ、各国の視察のため、大陸に渡って、モンブラン邸に泊めてもらったりもした。

慶応元年八月二十六日（一八六五年一〇月一日）にはブリュッセル市において新納・五代はモンブランと十二箇条からなる貿易商社設立に関する契約書を交換する⁴⁹。かくしてモンブランと薩摩藩との関係が深まっていく中、一八六七年（慶応三年）にパリに開催予定の万国博覧会の開会を控えて、薩摩藩はモンブランを代理人として指名し出展の準備に取り掛からせる。伯爵は幕府とは別名義で薩摩藩単独の参加を企図し、出展企画を進めていく。家老岩下方平（岩下佐次右衛門）は薩摩藩および琉球王国の全権としてパリに赴き、モンブランとともに出展企画の推進に力を添える。

そこへ徳川昭武を団長とした幕府使節一行がパリへ到着してみると、豈図らんや薩摩藩が琉球国王という名義で個別出展を仕組んでいることを知り、大いに驚いた⁵⁰。幕府使節側は、厳しく抗議し、出展者名を改めることを強要した。モンブランと岩下は幕府側と交渉し、幕府側は「大君政府」、薩摩藩側は「薩摩太守の政府」とし、ともに日の丸を掲げることで妥協した。妥協したといえども

「薩摩太守の政府」と言う出展者名は、どうやら西洋人の目にはなお独立国家紛いの意味合いを暗示するものがあつた。そこに、モンブランは、四月二二日に、日本の政体がプロシアの連邦制に似ており、大君は、基本的に大名と同格で、有力な一王侯に過ぎないといった論調の記事を *Le Figaro*, *Le Petit Journal*, *La Liberté* 等パリの有力紙に掲載させ、幕府側に失態を演じさせた⁵¹。

モンブランは、基本的に個人として行動し、時として幕府なりフランス政府なり、官僚体制に立ち向かい、またグラバー商会など、イギリスの会社に対抗する立場にあつて、常に苦闘を余儀なくされ巷間における評判は必ずしも良いとは限らないものであつた。

第二回の訪日

一八六七年八月にモンブラン伯は薩摩藩から軍制改革顧問に招聘されることとなり、日本への再訪の準備に奔走している。日本では政治情勢が危機状態に向かつていた。慶応二年（一八六六）に幕府は不服従の長州藩を処罰すべく諸藩に動員の命令を出して長州へ遠征軍を派遣し、慶応二年六月（一八六六年七月）から開戦に踏み切ったが、諸藩軍側に戦意が高揚せず、慶応二年七月二十日十四代將軍徳川家茂の急死を口実にしながら休戦せざるを得

なくなつたのであつた。かくて第二次長州征伐は呆気なく終結したが、幕府は、たつた一藩の反抗でさえ制裁不能という失態を天下に露呈し、その権威が地に落ちた反面、対幕強硬派の勢威は益々高揚していった。一方、幕勢の失墜は朝廷では討幕派の廷臣が台頭し、親幕の公家を朝廷から排除する契機となつた。孝明天皇は征夷大將軍の宣下を授けた徳川家への政權委任原則を首尾一貫して墨守していたが、慶応二年（一八六六）十二月二十五日に急死した。孝明天皇の後は幼い明治天皇が即位し、討幕勢力に逆轉の機運を齎した。

Charles de Montblanc 伯は、日本の歴史が動こうとしている轉換期の舞台に一役買う大志を抱いていた。伯爵は薩摩藩の軍制改革を担うべき顧問に招聘されていたので、一八六七年八月に薩摩藩のために小口径火器五千挺、大砲十二門、及び軍服を注文するよう岩下に勧めたが、薩摩使節は経費に不足しており、結局小銃のみを購入することにした⁵²。品物が実際に薩摩へ調達されたかどうかは不明である。モンブランは駐パリ薩摩藩代表岩下方平の名義で四〇万フランス・フラン相当の信用口座を開設したらしい。さらにフランス軍退役将校・兵士を幾人か雇い入れて、八月に日本に派遣した。これらの軍人の使命は薩摩藩海軍の近代化に寄与することにあつた。Fleury Héard 氏の言明によるとモンブラン伯はまるで私有民兵の將軍のように振る舞つていたという。尤も、

その「民兵」は九人しかなかったが⁵³。伯爵はさらに艦船の購入の幹旋もした⁵⁴。薩摩藩は矢張り幕府との衝突を予期していた。

一八六七年八月二十八日（慶応三年七月二十九日）岩下ら薩摩使節一行は、伯爵に加えて陸軍士官二名、海軍士官二名、鉾山技師二名、商人二名、従者一名を伴つて帰国の途に就く。乗船は上海に寄航し、出迎への薩摩藩士を乗せて、慶応三年九月二十一日（一八六七年一〇月一九日）長崎に到着した⁵⁵。英国領事 Harry Parks（ハリー・パークス）卿の一八六七年一月一日付の書簡によれば、伯爵が長崎で待ち受けの薩摩藩士から受けた歓迎振りは決して温かいものではなかったという。退役将校・兵士の派遣は、薩摩藩の大名島津茂久の承諾を得た上の行動ではなかったので、大名は難色を示す姿勢だつた⁵⁶。背景には兵制をイギリス式に轉換する大名の父島津久光の方針があつたのである。モンブラン伯と藩主との協力関係に関しては Parks 卿は深い疑問を抱いており、相互欺瞞に基づいたものに過ぎないと厳しく評価していた⁵⁷。英国領事が客観的な傍観者ではないことは言うまでもないが他にもモンブランの訪日が薩摩にとって迷惑になつていたことを物語る資料が散見する。たとえば、ある薩摩藩士の書簡に「卯十月八日方、岩下佐次右衛門・市来六左衛門夷国ヨリ罷帰候、又同十三日方、長崎へ被差越候、仏国ノモンフランドカイフ大寛被連来候由、大邪魔ナル事ニテ候、」⁵⁸とある一節は、薩摩藩士の一部に伯爵に対

する反感がかなり強かったことを端的に表現している。

一方、Pauthier氏がパリ方面で発表した記事はパークス領事の意見とは正反対のものである。Pauthier氏はNomoura-Sosshi（野村庄七）という薩摩藩主の名代がモンブラン伯に宛てた一八六七年十一月一〇日付の書簡の一部を引用している。

「伯爵様よ、ヨーロッパ人の言い習わした旧 Lotus 号、我が Shiohonal「シヨウホウ丸」は一八日に大阪を出航し、多分二〇日に長崎港に入港する予定である。同港に着いてから我が将校達は伯爵の行方を探知し、伯爵と落ち合うことは難しくないだろう。私は同船に乗船できるかどうかまだ知らないの
で、取りも直さず逸早く伯爵のお手元へ勝利の吉報をお届けしようと思ってお手紙を差し上げる次第です。準備は長かったが、企画は貴著 (*Le Japon, Paris, 1865; le Japon tel qu'il est, Paris, 1867*、二年の間隔で著されたこの二冊の小冊子は「意見がどれだけ大きく変わったかを示すものである」⁵⁸によって啓示され、貴方の行動によって支持された法的根拠を踏まえて忠実に遂行されたのです。天皇陛下を総裁に、日本連邦は今やあらゆる幻想から解放された。將軍は覚束ないものとなっていた政権を天皇陛下に奉還しました。日本文明は勝ち誇っている、お喜び下さい。完勝を収めました。（中略）「天皇は」

將軍の辞職を認め、われらの企画に則って次のような解決を公表されました。天皇陛下は京都に諸侯を召集され、主権を有する議會を設立させるのです。同議會はあらゆる公益に係わる問題について決裁しなければならないものとするのです。

外国人の要請は、すでに関東地方の諸領地（つまり徳川家の諸領地）に存在している基礎に基づいて天皇陛下の御名義において承認されました。諸外国との締盟は他の諸領地に拡大すべきであり、そしてもつと自由な基礎に基づいて再構想されるべきです。天皇陛下が連邦議會の決議を勅令・公示を以って公布されるものとするのです。（中略）

伯爵様よ、以上のように国民の党より近況・現状の要約をお伝えします。同党の法体制設立への運動は、法律の道から一寸も逸れなかったのです。法律の道には、伯爵がもつとも重きを置いておられるし、わが国の文明も貴方の文明と同様にその道を会得しています」。⁵⁹（筆者訳）

上記の野村庄七が大政奉還の翌日に認めた書簡によれば、伯爵は討幕派の間に相当の人望を集めていた様である。上記の「企画は貴著 (*Le Japon, Paris, 1865; le Japon tel qu'il est, Paris, 1867*、二年の間隔で著されたこの二冊の小冊子は「意見がどれだけ大きく変わったかを示すものである」⁶⁰によって啓示され、貴方の行動によつ

て支持された法的根拠を踏まえて忠実に遂行されたのです」という一節によれば、モンブランの論文は大政奉還の法律的根拠を提供したということになるが、それは伯爵の弟 *Albéric* の証言に呼応している⁸²。これによればモンブランが長崎に到着した時、出迎えに來た薩摩藩士から、その内和文に翻訳された彼の著作に祖述した意見に維新派が大いに賛同し、それを建策の基礎に採用したと聞き知ったという。

伯爵の悪評判は主として駐日フランス全権公使 *Léon Roches* 氏に帰すものだった。*Roches* 公使は落ち目の幕府に軍事協力や経済援助を提供して、幕勢再建の後ろ盾となる政策を次々に繰り出していたので、薩摩に味方する伯爵の行為はその政策に大いに邪魔するものだったことは想像に難くない。一八六七年八月末將軍との謁見の際、*Roches* 公使は、伯爵がフランス政府当局の正式の承認を得ているのではないかと問い質されて、それを全面的に否定しなければならぬ場面もあった。*Roches* 公使は出来る限りモンブランの名声を汚そうとしていた。モンブラン伯が日本へ派遣したフランス人の水夫達の査証は何かの手違いで発給されてしまったこと、伯爵がかなりの給料で雇用した顧問は三年間の契約が結ばれたにも拘らず、六箇月後解雇されたことなど、醜態を曝していた。その後、明治維新後、*Roches* は伯爵に対する態度を一変して、伯爵と協力することさえした⁸³。

伯爵の再度の訪日の当時日本の政情は激変していた。一八六七年五月に薩摩藩軍が天皇の膝元京都に入って都を占領した。また、土佐藩をはじめ他の藩もそれに加担するものが出た。慶応三年十月十三日（一八六七年十一月八日）、倒幕派の暗躍によって天皇から薩長両藩（長州には十四日）に倒幕の密勅が下された。十四日、將軍は朝廷に大政奉還の上表を提出し、翌日勅許が下る。次に慶応三年十月二十四日（西暦一八六七年十一月十九日）に徳川慶喜は、征夷大將軍職の辞表を朝廷に提出するが、聴許されず、大政実行は事実上依然と幕府の手中に残っていた。こうした状況を焦慮している薩摩藩討幕派は、岩倉ら王政復古派公家と組んで、いわば宮廷クーデターを敢行した。つまり、慶応三年十二月九日（一八六八年一月三日）に幼い帝臨御の下、摂政・関白・將軍職の廃止、新たに総裁、議定、参与の三職を置くなどの新方針を盛り込んだ所謂王政復古の大号令が発せられる。この大号令を受けて同日夕方小御所で国政會議が開かれ（所謂小御所會議）、大政は天皇に復帰し（王政復古となり）、幕府は廃止された。つまり明治維新である。ところが、この新規政体は、事実岩倉一派と薩摩藩討幕派が数藩を仲間引き込んで強引に作り上げたに過ぎないのであった。諸侯の大半は慶応三年二月九日（一八六八年一月三日）に発せられた王政復古の大号令に呼応せず、依然として徳川家の大名統轄権を認めていた。しかも、慶応三年十二月十三日

に大坂城に戻っていた慶喜は十六日にイギリス・フランス・オランダ・プロシア・アメリカ・イタリア六箇国の公使を引見し、王政復古が不正な行為と非難し、各国に内政不干渉を要請して、各国公使の了承を得た。国際的には、徳川政府は依然として日本国の正統政府として認められていた。次第に窮地に迫り詰められた岩倉ら王政復古派と薩摩藩倒幕派は戦争に訴えて徳川側を挑発した。慶喜は薩摩藩討伐軍を京都へ差し向けた。慶応四年正月三日に徳川軍の先頭が鳥羽と伏見で薩長軍と衝突した。この鳥羽・伏見の戦いは、局地戦といえども、政情に一大転換を齎し、最終的に徳川政府の命取りとなった。慶応四年四月十一日に江戸城が開城されることよって徳川政府は事実上幕を閉じ、新政府が日本国唯一の政府となった訳である。慶応四年七月十七日に江戸が東京に改称され、慶応四年九月八日明治と改元されて、明治元年十月十三日に天皇は東京城に入る。明治元年十二月に天皇は一旦京都に帰還するが、翌明治二年三月二十八日に再度東京に行幸し、そのまま定着して事実上の遷都となる。江戸開城後、大勢が決まったといえども、旧幕府系勢力の武力反抗が東日本の各地で起きた。この戊辰戦争として知られている内戦は結局明治二年五月の五稜郭の陥落で天幕政府側の完勝に終結した。

倒幕維新との関わり

モンブラン伯が一八六七年一〇月中旬から一八六九年一二月末まで日本に滞在していたことは確かだが、上記の矢継ぎ早に展開する一連の事件にどんな関わりを持っていたか。Cobbing（犬塚孝明著『薩摩藩英国留学生』の英訳）によると、モンブランは日本人の岩下佐次右衛門氏に勧誘されて日本へ渡航したという。岩下氏の主たる目的は伯爵を薩摩の軍事上の顧問として利用することにあつたらしい。ところが、内戦が起きた時、伯爵は殊の外外交官として活躍することになった。かくして列強諸国の駐日公使に対する王政復古宣言の正文編集に積極的に関与していたというが、それは以下に説明する通り過言である。薩摩藩に倒幕の密勅が下された一八六七年一月八日には、岩下らは、長崎奉行河田相模守の反対に構わず、新たに購入した春日丸にモンブラン一行を乗せて鹿児島へ向かって出帆する⁶⁴。出帆の翌日徳川慶喜は大政奉還を上奏し、その又翌日は勅許が下る。その同日野村庄七がモンブランに完勝の吉報を伝える。この書簡の筆調（仏語訳かしらないが）からして大阪から書簡を送る筆者はどうもモンブランが長崎にいたとばかり思い込んでいる様だが、近況を把握していないためだろう。兎に角、大政奉還の報知を受けて対外関係を顧慮し

薩摩藩の討幕派主導者達は、新政府の成立を各国に通知し、諸外国の了承を受けるという必要性を認識して、薩摩藩に到着したモンブランに通知案の起草を依頼する⁶⁵。ところで、伯爵の薩摩での宿泊先は藩庁の命令で鹿児島城下ではなく指宿村湊の回船問屋浜崎太平衛なる島津家の御用商人宅に指定された。このような軟禁とも言うべき状態に置かれたのは、フランスの名代と看做されたモンブランを公然と抱えることが藩の親英政策に不都合なのではないかと懸念していたからだ。ところが初回の薩摩への渡航が一月一〇日だとすれば、藩内の滞在は短期間であつた。なぜならば、一八六七月一二月二日には長崎にいたからだ。その日モンブランは、自分が薩摩藩の為に購入・調達した蒸気軍艦に乗って鹿児島に向かつて（再び？）長崎から出航しようとするところであり、出帆の一時間前、急いで無造作な筆致で母親宛に手紙を書き捨てて送る⁶⁶。その手紙には自分のことが「現在中国と日本において重要な関心事になっている」と述べている。これもまた謎めいた表現だが、「中国」とは上海に出張している薩摩藩士のことを指すという意味に敢えて取るなら、自分が邪魔者になつてしまつたと認識していることを仄めかしているものかもしれない。また同書簡には、「ご無沙汰したのは、仕事を着々と捗っていたので長崎を後にすることを延したからだ」と母親に対してご無沙汰を謝っている。だとすれば、一〇月一九日に長崎に到着してから一二月

二日まで二月足らず長崎に逗留していた可能性も無きにしも非ずである。

Bassompierre によると、伯爵は薩摩の藩主に温かい歓迎を受けたという。伯爵の弟 Albéric de Montblanc が遺した記憶帳による情報というのだが、地元 Ingelmunster の郷土史家 Albert Verscheure 氏の所蔵資料に含まれている記憶帳 "memorieboek" は、おそらく Albéric の記憶帳の複写と思われるが、生憎 Bassompierre が典拠としている箇所が見当たらない⁶⁷。伯爵は大名の資格に相応の儀式で歓迎され、藩主から一八六七年バリ万博における尽力を労つて大刀を授けられた。Bassompierre がモンブランはこの時期に上京したと言っているが、上述の母親宛の手紙、さらにコルトレイク国立公文書館所蔵 Descantons de Montblanc 家文書所収の英国領事 Marcus Flowers 氏の書簡から、モンブランはこの時点で長崎から鹿児島へ渡航したことが分かる⁶⁸。ところが、上述の母親宛の手紙には「京都から前回の郵便船をもつて Marcou 氏宛に書簡を郵送して、その内容を *l'Opinion mondiale* 等の新聞に掲載してくれるよう頼みました。」とある記述が事実であれば、（一八六七年）二月二日長崎から鹿児島へ出帆する以前に既に上京の経歴があつたことになる⁶⁹。薩摩藩の為に蒸気軍艦を購入・調達したに留まらず、また近近パリの自分の住所と名義宛に銃砲と大砲の代金として何と一千九百万フランの巨額が送金される見込みであると母親

に通知している。その時点では彼の事業は順調に捗っていた様である⁷⁰。送金が実現したかどうか明らかでない。

一方、一箇月後、慶応三年十二月九日（一八六八年一月三日）に京都で王政復古の大号令が発せられる運びとなるが、その際、岩下方平が新規三職制の内参与に任命され、同日の小御所会議に参席する。岩下とモンブランとの緊密な関係からしてモンブランもその際岩下の顧問として上京していた可能性が高い。さらに王政復古の延長線上慶応三年十二月十九日（一八六八年一月一三日）に大久保利通と寺島宗則が、新政権の成立を諸外国へ通知し、それらの承認を得るために、通達詔書⁷¹を作成する際、アーネスト・サトウ（英国公使館付通訳）やモンブラン伯爵と協議する。京都の政治情勢はますます緊迫の度を深めていくため、薩摩藩家老新納刑部と藩士五代友厚はモンブランを伴って開聞丸に乗って兵庫に向かう。年が改まり慶応四年になると、一触即発の状況になり、遂に慶応四年一月三日（一八六八年一月二七日）に戦端が開かれ、同六日（一八六八年一月三〇日）薩摩藩の勝利と旧幕府勢力の敗北に終わる。慶応四年一月三日にモンブランは危険を避けて、兵庫の英国副領事の許に避難し、翌日大阪に在住のフランス代理領事の許に送られる⁷²。その後慶応四年の二月あたりから新政府の外交顧問として京都に滞在し、新政府の諮問に応じて意見を述べ、建言をしていた様である⁷³。

モンブラン家文書の中には伯爵のその間の動向に関する資料が数点含まれている。Charles が日本から発送した書簡四通を含むが、その内の一通は、すでに引用した、一八六七年十二月二日付の、母親宛のものである。それに加えてさらに、Nerva & Marchand 商社発信の書状二通と、そして Nathalie Ortman-Candez 女史が差出した書状一通も含まれている。商社も Nathalie Ortman-Candez 女史も宅配便の業者を伝に伯爵の日本における動静について消息を受け取り、その消息をモンブランの母親に伝える内容の書状である。

Bassompierre にとって一番大事な情報の源泉は Albéric de Montblanc の記憶帳だった。生憎記憶帳はその当時の伯爵の動静についてあまり明瞭な情報を記載していない。兄は異常な状況の下、異国のものを無差別に敵視し、従って兄の意見こそを禁物とするような国にあって、政府当局の側近として活躍していたと、さらに「日本人並みの扱いをされ、宮殿に住まわせてもらい、彼が付き添っていた党派の指導者が開く協議、そして作戦・政策に関する重要な決議等に関与していた。」と弟 Albéric は書いている。Bassompierre は、伯爵が明治維新において確かに重要な役割を果たしたというが、具体的な事例は挙げていないが日本側の資料と付き合わせると、彼はどんな地位にあったか分かる。『中外新聞』第二十七号（慶応四年・閏月四・二十二日）に、

「仏蘭西コウント・モンブラン、御門の師傅となり永く京師に滞在すべき趣風聞あり。外国百版の事務すべて此人の裁断に出づ……」⁷⁴

とあるように、外交に重要な地位を占めていた様である。その地位を梃子に伯爵は一八六八年三月から五月にかけてフランス外交の一助となる。ルーヴアン大学日本学科の修士課程学生 *Brigit Debeert* は駐日フランス外交官とバリの外務省との文通を調査した。それによれば明治維新の後、駐日フランス全権公使 *Léon Roches* は政策を一八〇度転換した。今後は、王政復古勢力、天皇政府に目を向けることにした。フランス外交筋は伯爵を、新政府と良好な関係を築き、有益な情報を得る情報源泉として打ってつけの存在と看做した。伯爵はその期待に沿うべく日本におけるフランスの影響を増やすのに非常な努力を費やしていく。かくして、フランス外交官が明治維新以前に抱いていたモンブラン伯爵に対する否定的なイメージは完全に消し去られていく。その後は伯爵を働きの者、頼るべき者、いつでも当てになる者等と持て囃すような言葉遣いになる。ところが、一八六八年六月に入ってから、伯爵の名前が突然外交文書から消える。これは *Léon Roches* 公使の辞任と関係がある。実は駐日公使としての *Roches* の任務は一八六八年六月に *Maxime Outrey* 氏に引き継がれた。

モンブランは *Léon Roches* の辞任を遺憾に思った。一八六八年一〇月一九日付の、母親宛の書状から読み取れるように、*Roches* の人格に大いに敬服し、賢明な人であり、日本におけるフランス国の影響に大きな躍動を与えた人として褒めている。一方、後任の *Maxime Outrey* 氏の政策は毛頭評価できないという。「(*Roches*)の後継者の政策は孤立化や無活動の一語に尽きるものの様で、イギリスは益々その影響を拡大しているばかりだ。」また、この母親宛の書状から日本国内政情に関するモンブランの意見を垣間見ることにも出来る。内乱(戊辰戦争)を防げなかったことを遺憾に思っている。色々な理由によつてこの「内戦」は日本にとつて極めて不利を齎すものであるという。国を破壊し、王政復古勢力の権威を危うくして、誤った選択肢に導く恐れがあるとしており、明治維新政府の諸外国による承認を妨げ兼ねないものと懸念している。さらに王政復古勢力に反抗する旧幕府勢力を攻撃すると同時に、法律の曲げた解釈をして自己の利益のみを追求する狂信的な尊王論者も非難していた。さらに、フランスの新聞に報道される情報は誤っているとしてそれを訂正する。書状の終わりに、伯爵は近代化の穏健派が大勢をなしていると判断して、日本の将来を樂觀的に観ているという⁷⁵。

同書状には殊の外興味をそそる一節がある。自分のことを次のように描写するところである。「私の方は、ミカドの一臣僚である

だけに誠意を尽くして意見を述べさせてもらう一存である」⁷⁶。

かのミカドの一臣僚 (officier du Mikado) をどう解釈すればいいのか。フランス語の単語「officier」には、「官吏」という古風な意味が含まれている。皇軍の将校という意味なのかそれとも官吏・役人と解釈すべきなのか。彼は本当に皇軍の将校で、積極的に内戦に参加したのだろうか。彼の顧問としての資格を指すか、または、既に公務弁理職への任命が決定されていたのでそれを指すだろうと私は思う。モンブラン家文書内に含まれている「覚書」によれば、彼は一八六八年三月七日付を以て駐仏総領事（後公務弁理職と改名）に指名されたという⁷⁷。日本側の資料によればそれは一八六八年三月三日であった。その日新日本政府が Léon Roches 公使に宛ててモンブランが駐仏総領事に任命された旨を通達する⁷⁸。次の書状は一八六八年一月一八日付のものである。あまり具体的な内容を含んでいないが、母親に対する愛情を表現していると同時に、伯爵が少し心寂しい思いをしていたことも読み取れるのである⁷⁹。

一八六八年十一月一日に Nerva Marchand et Compagnie 社が Charles の母親に書状を寄せている。同社のロンドン支店では日本からの貨物を受け取っており、CDM という頭文字が箱に記入している⁸⁰ので、Charles de Momblane からの発送と思われるものという内容である。貨物は五個の箱に詰め込んであった日本の品物だっ

た。また、同書状では、同社は一八六七年パリ万博の売れ残りの日本出品物の払い下げ業務をも引き受ける用意があるという意思を表明している。幕府は万博への出品を閉会後便宜上フランスに残して、その払い下げ業務を幕府の領事 Paul Fleury-Héard 氏に託していたが、その実施前に Fleury-Héard 氏が解任され、出品を払い下げる業務は、その後任となった伯爵に負わされたのであった⁸⁰。引き続き伯爵は、Fleury-Héard の助手 Chevrillon 氏に出品物をロンドン市場で払い下げるよう委任したのであった。

Nerva Marchand et Compagnie 社では伯爵の日本での最近の動静についても便りを受け取ったところだった。伯爵の「党派」は新潟で大勝利を収めたという。その大勝利の具体的な内容は明記していない。また子息が元気になっていると母親を安心させている⁸¹。

ところが、その健康状態はその直ぐ後悪化してしまったようである。一八六九年四月一九日付の次の Nerva Marchand et Compagnie 社からの書状は、伯爵罹病状態の便りを伝えた。二箇月前から伯爵は一字も紙に記すことができなかった程の重病であったという。書状では伯爵がどういう病気に悩んだか書いていないが、かなり深刻だったことが明白である。発信者は病気がもう治りつつ

あると伯爵夫人を安心させ、次の便りで Charles が全治したときと伝えられるだろう、と希望を述べている⁸²。

さらに Nathalie Ortman-Candez 夫人が一八六九年八月一二日付で伯爵夫人宛の手紙に子息の Charles に関する便りを伝えているなかで、「日本国のために尽力する甲斐があったと人々は言っている」と書いている。謎めいた表現で、その意味がよく分からない。さらに伯爵が Ortman-Candez 夫人の主人の長崎にある家に泊まったとも述べている。モンブランが Ortman という人物と交際があったことが分かるが、商人ではないかと思われる。また手紙は所謂内乱（戊辰戦争）の発展について、憂慮すべき便りを含んでいる。Brunet というフランス将校が反皇軍隊勢力の一部を率いたので、皇軍将校はフランス人に対して敵対行為をとった。フランス大使館員は既に五回襲撃されており、公使館に放火するぞ等とさえ脅された。フランス外交官とイギリス外交官の強い抗議にも拘らず、江戸の知事は然るべき措置を渋っていたという⁸³。

モンブラン家文書のなかには、Charles が六月七日付で鹿児島と思われる発信地から母親に宛てた書簡が一通あるが、年は不詳である。本文で伯爵は六・七週間以内に日本から出航することになるだろうとお待ち兼ねの母親を慰めている。実際出航したのは一八六九年一二月であるから多少見当違いではあるが、それでも当書簡の発信時は一八六九年内に相違ないと思われる。不思議にも、

上述の一八六九年四月一九日付の Nerva Marchand et Compagnie 社発信の書状で言及された一八六九年前半の罹病には、丁度治ったところの筈なのに、一切触れない。この六月七日付の書簡では、出航する予定ではあるが、始末なり、包装なり遣り残しのことがまだ沢山あると書いている。また天皇が江戸に行幸⁸⁴したのに伴って自分も江戸へ招請されているなど、どうしても日本滞在を多少延長しなければならぬという⁸⁵。

やがてモンブランは一八六九年一二月二六日に横浜港から出帆して帰国の途に就くが、翌年の春にパリに着いた。一八七〇年五月六日に、漸くフランス皇帝から認可状が下り、日本領事（公務弁理職）に就任する⁸⁶。伯爵はもう二度と日本の土を踏むことはなかった。

参考文献一覧表（著者氏名アルファベット順）

新谷九郎（一九七四）「解説―五代友厚伝の「考証」的再検討」日本経営史研究所編『五代友厚伝記資料』第四巻、二二五―二五三頁、東京：東洋経済新報社。

Descantons de Montblanc 家文書 [Familie-archief Descantons de Montblanc]
Rijksarchief Kortrijk（コルトレイク市国立公文書館寄託）整理番号は（E. Warlop, "Inventaris van het familie-archief Descantons de Montblanc"「館内未刊目録」による）。

- Albert baron de Bassompierre (1953), "Charles de Montblanc et la Restauration japonaise de 1868," *Revue générale belge*, Vol.89 (1953.6) pp. 229-244.
- W. G. Beasley (1995), *Japan Encounters the Barbarian: Japanese Travellers in America and Europe*, New Haven, CT: Yale University Press.
- John Bowring (1859), *A Visit to the Philippine Islands*, London: Smith, Elder & Co.
- K.I. Choi (1958), *Shibusawa Eiichi and his Contemporaries: A Study of Japanese Entrepreneurial History*, Cambridge, MA: Harvard University.
- Andrew Cobbing (2000), *The Satsuma Students in Britain: Japan's Early Search for the "Essence of the West"*, Richmond, Surrey: Curzon Press.
- Henri Cordier (1912), "Le premier traité de la France avec le Japon (Yedo, 9 Octobre 1858)", *Young Pao*, Vol.13 (1912), pp. 205-289.
- Gordon Daniels (1996), *Sir Harry Parkes, British Representative in Japan 1865-1883*, Richmond, Surrey: Japan Library.
- Birgit Debeers (2005), "Handelsagenten en wapenleveranciers voor Satsuma: Thomas Blake Glover en Graaf Charles Des Cantons de Montblanc," *Katholieke Universiteit Leuven 修士論文*.
- Mark D. Ericson (1979), "The Bakufu Looks Abroad: The 1865 Mission to France," *Monumenta Nipponica*, Vol.34:4, pp. 383-407.
- 大塚孝明 (一九七四)『薩摩藩英国留学生』(シリーズ〈中公新書〉三七五) 東京: 中央公論社。
- 大塚孝明 (一九八七)『明治維新対外関係史研究』東京: 吉川弘文館。
- 磯見辰典、黒沢文貴、櫻井良樹編 (一九八九)『日本・ベルギー関係史』東京: 白水社。
- Marius B. Jansen (1961), *Sakamoto Ryōma and the Meiji Restoration*, Princeton, N. J.: Princeton University Press.
- 鹿兒島県維新史料編さん所 (一九七七)『鹿兒島県史料・忠義公史料 (第四卷)』鹿兒島県
- 君塚進編 (一九七四)「仏英行(柴田剛中日載七・八より)」沼田次郎、松沢弘陽編『西洋見聞集』(シリーズ〈日本思想大系 96〉) 東京: 岩波書店。
- 国史大辞典編 (一九七九・一九九七)『国史大辞典編集委員会』東京: 吉川弘文館。
- Pierre Landy (1970), *Rencontres franco-japonaises: Catalogue de la collection historique réunie sur les rapports de la France et du Japon du XVIIe au XXe*, Tokyo: Ambassade de France.
- Madelaine de Langalerie-Robin (1970), "Charles de Montblanc et la restauration de Meiji,"『日仏文化』第二四卷 (一九七〇) 四三・六七頁。
- Francisque Marnas (1931), *La "religion de Jésus" (Yaso ja-kyō) ressuscitée au Japon dans la seconde moitié du XIXe siècle*, Vol.1, Paris: Clermont-Ferrand.
- Meron Medzini (1971), *French Policy in Japan during the Closing Years of the Tokugawa Regime*, Cambridge, MA: East Asian Research Center - Harvard

University.

宮永孝 (二〇〇〇) 「ヘルギー貴族モンブラン伯と日本人」 ("Count de Montblanc and the Japanese") 『社会志林』 (*Hosei journal of sociology and social sciences*) (第一四七卷第二号) 一八二・一八八頁。

A. Descanons de Montblanc, "Memorieboek" (未刊 Albert Verscheure 氏所蔵)。

宮本又次 (一九八二) 『五代友厚伝』 東京：有斐閣。

宮沢真一 (編集) (一九八八) 『英国人が見た幕末薩摩 — Englishmen & Satsuma』 鹿児島：高城書房。

Charles Comte de Montblanc (1867), *Le Japon tel qu'il est*, Paris: Arthur Bertrand.

Charles Comte de Montblanc (1877), "Les Iles philippines", *Mémoires de la société des études japonaises chinoises tartares et indo-chinoises*, Vol.2, pp. 41-98.

C・モンブラン著、森本英夫訳 (一九八七) 『モンブランの日本見聞記 フランス人の幕末明治観』 (シリーズ〈日本見聞記シリーズ〉) 東京：新人物往来社。

森有礼 (一九七二) 『森有礼全集 第二巻』 東京：宣文堂書店。

大久保利謙編 (一九七二) 『森有礼全集』 (シリーズ〈近代日本教育資料叢書〉第一巻) 全三冊、東京：宣文堂書店。

中山泰昌編 (一九八二) 『新聞集成明治編年史』 第一五巻、東京：本邦書籍。

尾佐竹猛 (一九四四) 『幕末外交秘史考』 東京：邦光堂書店。

Blaise d'Ostende-à-Arlon (1967), *Noblesse belge d'aujourd'hui*, (Les cahiers nobles), Vol.31, Paris: Les cahiers nobles.

[Jean Pierre Guillaume] Pauthier (1871), "Japon," *Annuaire encyclopédique, publié par les directeurs de l'Encyclopédie du XIX siècle*, 1869-1871, Paris: au Bureau de l'Encyclopédie du XIXe siècle, 1871, p.887 以下。

G. Rolin (1865), *Mémoire pour Mme la comtesse de Montblanc et ses enfants, intimes, contre Mm. les barons de Plotho, appelants devant la cour d'appel de Gand*, Ghent.

Ernest Mason Satow (1921), *A Diplomat in Japan*, London: Seeley, Service & co. limited.

鮫島尚信、鮫島文書研究会編 (二〇〇一) 『鮫島尚信在欧外交書簡録』 京都：思文閣出版。

August Schotte (1979), *Heertijheid Ingelmünster: Beschrijving der vrijheertijheid van Ingelmünster en haar bezitters (naar handschrift August Schotte)*, Tiel: Heenkundige kring 'Den Hert' Ingelmünster.

Bernard S. Silberman, Harry D. Harootian, eds (1966), *Modern Japanese Leadership: Transition and Change*, Tucson, Ariz: University of Arizona Press.

高橋邦太郎 (一九六七) 『チョンマゲ大使海を行く：百年前の万国博』 東京：人物往来社。

高橋邦太郎 (一九七〇) 『幕薩。パリで火花す：モンブラン伯』 『歴史読本』

（一九七〇年六月号、特別号）。

田辺太一・坂田精一訳・註（一九六六）『幕末外交談』第二巻（シリーズ〈東洋文庫72〉）東京：平凡社。

Leslie Stephen, Sidney Lee, eds. (1937-), *The Dictionary of National Biography*, London: Oxford University.

Willy Vande Walle (1996a), "Le Comte des Cantons Charles de Montblanc (1833-1894), Agent for the Lord of Satsuma," Ian Neary, ed., *Leaders and Leadership in Japan*, pp. 39-55. Richmond Surrey: Japan Library.

Willy Vande Walle (1996b), "Count de Montblanc and the 1865 Satsuma Mission to Europe," *Orientalia Lovaniensia*, Vol.27, pp. 151-176.

Willy Vande Walle (2005), "Charles de Montblanc: An Extraordinary Destiny,"

Willy Vande Walle, ed., *Japan & Belgium: Four Centuries of Exchange*, pp.

140-145. Brussels: Commissioners-General of the Belgian Government at the Universal Exposition of Aichi 2005, Japan.

Willy Vande Walle (2006), "Le comte de Montblanc (1833-1894) - entre

commerce et diplomatie," Sakae Murakami-Giroux, dir., *Actes du troisième*

colloque d'études japonaises de l'Université Marc Bloch - La Rencontre du

Japon et de l'Europe: Images d'une découverte, pp. 295-318.

Strasbourg/Colmar: Centre Européen d'Études Japonaises d'Alsace Département d'Études Japonaises de l'Université Marc Bloch.

Wim Vanhaecke (2005), "De familie Descantons de Montblanc (1834-1914), De

nacht van een adellijke familie in de negentiende eeuw," *Katholieke Universiteit Leuven*. (修士論文)

注

- 1 Bassompierre (1953), p. 232 によればモンブランは一八三三年パリに生まれ、一八九四年同都に没す。『国史大辞典』『モンブラン』はベルギーに生まれたとして、生没年を一八三二・九三年とする。磯見ら（一九八九）六四頁は、一八三三・九四年とし、Ingelmunster に生まれたとしている。森本英夫は一八三二・九八年としている〔C・モンブラン著、森本英夫訳（一九八七）『モンブラン、デュパン、ボヌタン、カヴァリオ』一九八頁を参照〕。ところが、伯爵の弟 Albéric から情報を得た Bassompierre (Bassompierre (1953)) は「一番信頼すべきものであろう。Albéric が記した稿本 "Memorieboek" (記憶帳、原仏文) (p.251) によれば、Charles は一八三三年パリに生まれ、同都で一八九四年一月二二日に亡くなり、二七日に Ingelmunster に埋葬されたという。Landy (1970), p. 14 によれば五月一二日に生まれたという。宮本（一九八二）五〇頁は、高橋（一九七〇）によりながら誤って一八三二年に Ingelmunster に生まれたとしている。
- 2 犬塚（一九七四）一一二頁。
- 3 磯見ら（一九八九）が Charles de Montblanc はフランス南部の貴族の子孫で、フランス革命の際にベルギーへ亡命したとするが、この説の根

拠は一切挙げていない。

- 4 一八二五年六月一四日に亡くなったプロート及びインゲルムンステル男爵 Charles-Joseph-Louis-Marie-Christiaan baron de Plottho et d'Ingelmunster 氏は、Charles-Albéric-Clément Descantons de Montblanc 及び妹の Suzanne-Agathe-Félicité Descantons de Montblanc を遺産の受取人として遺言書に書き記し、すべての遺産をその兄弟に遺贈した。
- Charles-Albéric-Clément は本稿の主題となる Charles Ferdinand de Montblanc の父であった。既述の Charles-Joseph-Louis-Marie-Christiaan 男爵の弟 Ferdinand-Maximilien-Auguste-Christiaan de Plottho は一八三五年一月一九日に亡くなり、同様にモンブラン兄弟にすべての遺産を遺贈した。しかしプロシア系 Plottho 男爵はこの二通の遺言状を認められないとして、自分が正当な相続人であると訴えた。結局、プロシアにあった財産はすべてプロシア系男爵に押収され、モンブランの方は Ingelmunster しか相続しなかった。プロシア領内の遺産を回復するためにモンブランはマクデブルク、ハルバーシュタット及びベルリンで法廷闘争を繰り返したが、ベルリン最高裁判所は上告を却下した。Plottho 家は仕返しにベルギー法廷に上告したが、当廷はモンブラン家の有利に決定した。[Rolin (1865), p.4 以下]

- 5 この情報はモンブラン家の歴史を研究した (Ingelmunster 出身の) Albert Verschuer 氏に負う所が多い。ところが、前代昔の歴史家 August Schotte の編著によれば、ベルギー王レオポルド一世が Ingelmunster 男爵の爵位

を授与したのは一八三八年二月一二日であり、既に以前にフランス王ルイ・フィリップから Oisy 伯爵号を授与されていたことである。

[Schotte (1979), p. 93 参照]

- 6 d'Ostende-à-Arion (1967), "Descantons de Montblanc, Baron d'Ingelmunster" 参照。いずれにせよ、勅令によって家族はベルギーにおける定住の許可を得た。[Rolin (1865), p. 115 参照]

- 7 詳細は拙論 Vande Walle (1996b) と Vande Walle (2005) 参照。

- 8 宮本 (一九八二) 五一・五二頁。これは明らかに高橋 (一九七〇) 一七頁に基づいたものである。

- 9 宮本 (一九八二) 五二頁。

- 10 高橋 (一九七〇) 一一七頁。

- 11 宮本 (一九八二) 五二頁。

- 12 大塚 (一九八七) 一一二頁、大塚 (一九七四) 八七頁。

- 13 君塚 (一九七四) 二九六頁。

- 14 大塚 (一九七四) 八六頁に引用。

- 15 大塚 (一九七四) 八八頁に引用。原文は森有礼 (一九七二) 四六・四七頁。

- 16 Descantons de Montblanc 家文書 7621 号。

- 17 Descantons de Montblanc 家文書 4099 号: Inventaris sterfhuis (Charles Albéric Descantons de Montblanc の遺産総目録)。

- 18 「Erfenisangiften 19de eeuw (一九世紀遺産申告関係)」フィルム第 462

- 巻' 272833 号と272838 号：ホルトレイク市国立公文書館。
- 19 Vanhaecke (2005), p.138; p. 140 参照。
- 20 Bassompierre (1953), p. 231 は一八五八年か一八五九年と推測している。
『国史大辞典』『モンブラン』によれば一八六一年に個人観光客として初めて日本を訪問したという。高橋（一九六七）二二二・二二三頁は一八六五年としている。Landy (1970), p. 14 はモンブランが二七歳の時日本へ旅行したというから、換算すれば一八六〇年に当る。大塚（一九七四）は文久元年（一八六一年）としている。
- 21 磯見ら（一九八九）六四頁によれば Gros 男爵と同伴して日本へ渡航したと述べているが、典拠を挙げていない。
- 22 Cordier (1912) 参照。
- 23 Bassompierre (1953), p. 232.
- 24 磯見ら（一九八九）六四頁。
- 25 Montblanc (1877), pp. 41-98.
- 26 Willy Vande Walle (1996a)。
- 27 Montblanc (1877), p. 68.
- 28 *The Dictionary of National Biography*, Vol.2, p. 987.
- 29 Bowring (1859), p. 102.
- 30 Bowring (1859), p. 5.
- 31 Bowring (1859), p. 341.
- 32 Bowring (1859), p. 427.
- 33 Montblanc (1877), p. 68.
- 34 Descantons de Montblanc 家文書 10.077 号：題なし (Contract rond Filippijnse suikerfabriek / 一八五七年七月二九日付フィリピン製糖工場に関する契約)
- 35 Descantons de Montblanc 家文書 4099 号：Inventaris sterfuis (Charles Alberic Descantons de Montblanc の遺産総目録)。
- 36 P. de la Gironière, *Aventures d. un gentilhomme breton aux Îles Philippines Avec un aperçu sur la géologie et la nature du sol de ces îles, sur ses habitants, sur le règne minéral, le règne végétal et le règne animal; sur l'agriculture, l'industrie et le commerce de cet archipel; P. de la Gironière. Illustrations d'après documents et croquis originaux Par Henri Valentin (des Vosges)*, Paris au comptoir des Imprimeurs-Unis, Lacroix-Comon Quai Malaquais, 15 et chez L'auteur, 85, Rue de la Victoire, 1855.
- 37 宮永（二〇〇〇）' 四頁（一七九頁）。
- 38 宮永（二〇〇〇）四頁（一七九頁）。根拠は中里機庵著『幕末開港綿羊娘情史』（赤炉閣書房、昭和六年二月）であるが、どこまで信憑しいいか疑問の余地がある。村松梢風著『フランスお政』という小説もののエピソードを題材にしており、モンブランとお政が登場するものである。また、一九三三年に、村松梢風原作を脚本にして「フランスお政」という題名の映画（日活製作）が公開された。高橋（一九七〇）一一四頁を参照。

- 39 高橋 (一九六七) 二二三頁によるが、出典は明記しない。
- 40 田辺 (一九六六) 二五四頁、高橋 (一九六七) 二二三頁を参照。
- 41 C・モンブラン著、森本英夫訳 (一九八七) 富田仁による序文を参照。
- 42 Beasley (1995), p. 96.
- 43 Medzini (1971), p. 58. Marnas (1931), p. 449 によればアフリカ第三大隊所属のフランス軍中尉アンリ・カミュが一九六三年一〇月一四日に被害されたということである。
- 44 Medzini (1971), p. 59 ではその名を「ナガアキ」と、犬塚 (一九七四) 八八頁では「ナガノブ」と訓ませている。
- 45 宮本 (一九八二) 五二頁、Vande Walle (2006), p. 302-304.
- 46 柴田剛中の日記『仏英行』慶応元年七月十八日条「仏国古諸侯の由旧知ベルデー住のモンフランドと申もの来り、三年前江戸ミニストル館に住居ありし縁を以、今般渡来を聞込、出府いたし、面晤の申入有之候。面会せし所、御国の義賞賛、且御国是一定有之度針砭の論談有之候。」君塚 (一九七四) 所収、二九九頁、Ericson (1979), p. 400.
- 47 『仏英行』慶応元年八月三日条「モンブラン来り、自街の語切に極る、遂に不忿の辞気あり。其人物愚詐に帰す。不日居城の地へ帰候趣なり。一の煩累を除去す」。君塚 (一九七四) 所収、三〇〇頁。
- 48 Ericson, p. 402; 君塚 (一九七四) 所収、三七九頁。
- 49 詳細は拙論 Vande Walle (1996b) 参照。
- 50 拙論 Vande Walle (2006), p. 308.
- 51 詳細は拙論 Vande Walle (1996a) 及び拙論 Vande Walle (2006) p. 309-310 を参照。
- 52 宮永 (二〇〇〇) 一五五頁 (二八頁)。
- 53 Medzini (1971), p. 158-159.
- 54 Vande Walle (1996a), p. 46.
- 55 宮永 (二〇〇〇) 二八頁 (一五五頁)。
- 56 宮沢 (編集) (一九八八) 一四八・一五四頁。
- 57 宮沢 (編集) (一九八八) 一四八・一五四頁、Debeerst (1995), p. 92.
- 58 鹿児島県維新史料編さん所『鹿児島県史料・忠義公史料 (第四巻)』鹿児島県、一九七七年、四七七・四七八頁。
- 59 括弧内の文は Pauthier の挿入。
- 60 Pauthier (1869-1871) "Japon," pp. 1004-1005°
- 61 原文: (*Le Japon*, Paris, 1865; *le Japon tel qu'il est*, Paris 1867, deux brochures in-8°, qui montrent, à deux ans d'intervale, une grande transformation d'idées)°
- 62 Bassompierre (1953), p. 236.
- 63 Vande Walle (1996a), pp. 47-48.
- 64 鹿児島県維新史料編さん所『鹿児島県史料・忠義公史料 (第四巻)』鹿児島県、一九七七年、二三三頁。
- 65 宮永 (二〇〇〇) 二九頁 (一五四頁)。起草案の全文は宮永 (二〇〇〇) 三〇頁 (一五三頁) に掲載されている。

- 66 Descantons de Montblanc 家文書 11.317 号：一八六七年二月二日付モンブラン発信母親宛の書簡（原仏文）。
- 67 Vanhaecke (2005), p. 150, n. 379.
- 68 Descantons de Montblanc 家文書 9995 号：駐長崎英国領事館よりの書簡；Vande Walle (1996a), p. 48; Vanhaecke (2005), pp. 149-150.
- 69 "J'ai envoyé par le dernier courrier une lettre de Kyoto à M. Marcou pour qu'il la fasse publier dans l'Opinion mondiale et autres journaux." Descantons de Montblanc 家文書 11.317 号：一八六七年二月二日付モンブラン発信母親宛の書簡（原仏文）。
- 70 Descantons de Montblanc 家文書 11.317 号：一八六七年二月二日付モンブラン発信母親宛の書簡（原仏文）。
- 71 詔書の原文は「朕は大日本天皇にして同盟列藩の主たり、此詔を承くべき諸外国帝王と其臣民とに対し祝辞を宣ふ。朕將軍の權を朕に帰さんことを許可し、列藩會議を興し、汝に告ぐるに左の如し。第一、朕國政を委任せる將軍職を廢するなり。第二、大日本の總政治は内外の事、共に同盟列藩の會議を経て後、有司の奏する所を以て朕之を決すべし。第三、條約は大君の名を以て結ぶといへども以降朕が名に換ふべし。是が為に朕が有司に命じ、外國の有司と應接せしめん。其未定の間は旧の條約に従ふべし」（『徳川慶喜公伝』第三十章）。この証書の正文は、寺嶋宗則がモンブランの起草案を基にして作成したという。宮永孝（二〇〇〇）三〇頁（一五三頁）。
- 72 宮永孝（二〇〇〇）三二頁（一五一頁）。
- 73 宮永孝（二〇〇〇）三二・三三頁（一五一・一五〇頁）。
- 74 『幕末明治新聞全集 第三卷』（世界文庫、昭和三十六年）一九四頁。
- 75 Descantons de Montblanc 家文書 11.317 号：一八六八年一〇月一九日付モンブラン発信母親宛の書簡（原仏文）。
- 76 Descantons de Montblanc 家文書 11.317 号：一八六八年一〇月一九日付モンブラン発信母親宛の書簡（原仏文）。"Quant à moi, je dis les choses avec loyauté comme je le pense comme je le dois étant officier du Mikado."
- 77 Descantons de Montblanc 家文書 4410 号："Mémoire présenté par Mir le Comte de Montblanc au Gouvernement Japonais, Imp Bastien 4, rue des Moulins."（原題）。
- 78 『大日本外交文書第一卷第一冊』（日本國際協會、昭和十三年）三四五・三四六頁。
- 79 Descantons de Montblanc 家文書 11.317 号：一八六八年一月一日付モンブラン発信母親宛書簡（原仏文）。
- 80 Debeers (2005), p. 99.
- 81 Descantons de Montblanc 家文書 11.317 号：一八六八年一月一日付 Nerval Marchand et Compagnie 発信の Virginie de Montgaillard 宛の書簡（原仏文）。
- 82 Descantons de Montblanc 家所蔵文書 11.317 号：一八六九年四月一九日付 Nerval Marchand et Compagnie 発信 Virginie de Montgaillard 宛の書簡

(原仏文)。

- 83 Descantons de Montblanc 家文書 11.317 号：一八六九年八月二日付
Nathalie Ortman-Candez 発信 Virginie de Montgaillard 宛の書簡(原仏文)。
- 84 明治二年二月に遷都決定三月二十八日に東幸実施、東京に定着。
- 85 Descantons de Montblanc 家文書 11.317 号：鹿児島より(一八六九年)
六月七日付モンブラン発信母親宛の書簡(原仏文)。
- 86 モンブランの公務弁理職としての活躍については拙論 Vande Walle
(2006) が詳しい。